

上原作和
安藤 徹 編
外山敦子

かぐや姫と絵巻の世界

一冊で読む竹取物語 訳注付

武蔵野書院

凡 例

○底本について（新井本を底本とした左記三本と校本三本とを校合した）

- 新井信之『竹取物語の研究 本文篇』国書出版、一九四四年（底本）
 南波浩 日本古典全書『竹取物語・伊勢物語』朝日新聞社、一九六〇年
 中田剛直『古本竹取物語』大修館書店、一九六八年、『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』塙書房、一九六五年
 吉川理吉『古本竹取物語校註解説』龍谷大学国文学会出版部、一九五四年
 王朝物語史研究会『竹取物語本文集成』勉誠出版、二〇〇八年

○本文について

本文に関しては、古本系統を尊重する立場から、①伝後光院宸翰古筆切本文、②新井本、③三手文庫本、④東海大学付属図書館桃園文庫本、および、流布本系の⑤天理図書館蔵武藤本、⑥里村紹巴本の優先順位を以て、新井本を底本としつつも、その書写状態に照らして本文を再建した。原則的に古本系統内の系統別多数決によるが、底本文の欠損部分に関しては、伝後光院宸翰古筆切本文、および流布本によってこれを補訂した（本行に〈 〉で表記）。したがって、これは現行『竹取物語』校訂本文中でも最大の本文量を有するものとなっている。また、諸本に異同の多い場合は、注釈にその旨を注記して参照できるようにした。

- ※ 直接の本文データは、上原作和「古本 竹取物語〈新井信之旧蔵『竹取物語』校訂本文〉」による。
 ※ 本文校訂の方針は以下の通りである。

- ・ 新井氏、南波氏、中田氏の積文が異なる場合は、原則多数決により、三者が異なる場合は新井氏のそれに従った。
- ・ 本文を改訂した場合は、「見えむ」のように、底本の形を傍書として示した。
- ・ 底本文に送りがない場合、「給へふ」のように〈 〉でこれを補った。
- ・ ひらがなを漢字にした場合、「竹取」のように元のひらがなをルビで示した。

- ・漢字をひらがなに改めた場合、「らむ」のように元の漢字を傍書として示した。
- ・かな遣いが歴史的かな遣いと異なる場合、「家」のように元の表記をルビ内に（ ）で示した。
- ※ 本文校訂・注釈・解説の執筆は上原作和が行い、山岸健二が校閲、安藤徹・外山敦子が補訂した。
- ※ 本文・注釈編に掲載した絵図は、東京大学国文学研究室蔵『竹取物語絵巻』によるものである。絵巻の使用を許可して下さった東京大学国文学研究室に感謝の意を表す。

○現代語訳について

訳出に際しては、学術上の知見に照らしてなるべく正確な訳文となるよう心がけた。意識を避け、原文の語順もなるべくそのままとなるよう努めている。ただし、あまりにも意味がとりにくくなってしまうような場合は、その限りではない。また、以下のような原則にもとづいている。

- ・時制・待遇表現などは、できるだけ原文に近くなるよう努めた。なお、地の文の文末をすべて敬体（いわゆる「です・ます」体）で訳すことはしない。
- ・作中人物の呼称については、原則として当該部分前後の原文にみえる呼称をそのまま訳文の中でも用いることとした。また、原文では多くの場合、主体等が明示されていないが、訳文ではこれを適宜補った。
- ・作中人物の心内の言葉は、明確に当の人物の心内の言葉としてくれる場合と、そうではない場合（語り手もしくは書き手の言葉としてもとらえる場合）とがある。本書の現代語訳では、試みに、前者の部分には実線を傍らに付し、後者の部分については破線を傍らに付した。ただし、特に後者については微妙な部分が多く、異なるとらえ方もありうることを認めなくてはならない。
- ※ 現代語訳は、安藤徹・外山敦子・櫻井清華の三名で分担し、全体を安藤が調整し、上原と外山が補訂した。
- ※ 詞書翻刻は櫻井が担当し、安藤が補訂した。
- ※ 絵巻場面の解説は櫻井が担当し、外山が補訂した。
- ※ 絵巻場面・構図比較一覧表は櫻井が担当し、上原が補訂した。

目次

凡例..... 3

本文・注釈編..... 7

現代語訳編..... 107

※上段の頁が「本文・注釈編」に、下段の頁（□シツク体）が「現代語訳編」にそれぞれ該当する。

① かぐや姫の生い立ち..... 9	② 妻どい..... 14	③ 仏の御石の鉢..... 25
④ 蓬萊の玉の枝..... 29	⑤ 火鼠の皮衣..... 40	⑥ 龍の首の玉..... 48
⑦ 燕の子安貝..... 59	⑧ 御狩の御行..... 68	⑨ かぐや姫の昇天..... 79
⑩ ふじの煙..... 95 128 132

補注..... 100

東京大学国文学研究室蔵『竹取物語絵巻』詞書翻刻..... 140

解説..... 171

『竹取物語絵巻』場面・構図比較一覧表..... 182

